

高等学校教科書に採録される古文テキストの日本語学的研究——徒然草第四五段を中心に——

刀田 絵美子

1. 問題の所在

学習指導要領の改訂^(注1)により、従来から古典(古文・漢文)を取り扱ってきた中等教育機関のみならず、小学校でも本格的に古典(古文・漢文)が教材として取り扱われることが予想される。本稿では、教科書に採録される古典、特に古文テキストについて、日本語史研究の立場から考察していく。

教科書に取り上げられている古文テキストの多くは、注釈書に依拠している。また注釈書は、信頼のおける古写本を底本とし、本文を作成した旨が凡例に記されている。

ところが、一般的に、資料の成立年代が古くなればなるほど、自筆本や成立時代に近い資料(写本)が現存するものが少なくなる。したがって、ここでいう「信頼できる」古写本とは、諸学の研究によって自筆本への近似が証明されたもの以外に、現代に至るまでの間に、より流通したテキストを有するものを指す場合がある。そしてそれらは、資料の成立から現在に至るまでに、何度かの転写を経たテキストである場合もある。

「転写」にも、様々なレベルがある。例えば、土左日記は紀貫之自

筆本が現存しないが、それを忠実に書写したとされる藤原為家本、更に為家本を忠実に書写したとされる青籟書屋本が存する。一方で、転写を行う際に、他の写本と校合する書写者がいたことも、現存する諸写本からは明らかである。また、本文の傍らに振り仮名・振り漢字・声点・濁音符・語句の注釈などを加えた資料も存する。

もちろん、資料によって状況に差はあるものの、成立・書写・転写の関係から、当該資料(例えば土左日記)の古写本であるからといって、原作者の記した文字やことばがそのままそこに記されているかどうかは分からない、ということも明らかである。つまり、私たちが目にしていく古文テキストは注釈が重ねられた、いわば「改変」されたテキストなのである。

初・中等教育機関で使用される教科書には、このような書写本を底本とする注釈書の本文に基づいた古文テキストが掲載されている。ところが、この古文テキストは、注釈書の本文を様々なレベルで「改変」したものである^(注2)。例えば、現行の教科書では、もともと漢字だけで書かれていた文献(例：今昔物語集)も、全て漢字と平仮名を用いて、書き記された文獻(例：今昔物語集)も、全て漢字と平仮名を用いて、書き記されている。

本稿では、現行の高等学校「国語総合」教科書を調査し、どのような古典作品の、どの章段が採録されているかを整理した上で、その内の一を取り上げ、教科書の古文テキストがどのようなレベルで「改変」されているのか、またそれはどのような問題を含むものなのかを検討していく。

2. 高等学校「国語総合」教科書における古文テキストの採録状況

文部科学省が公開している教科書目録 (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotoku/kyoukasho/main3_22.htm) によると、平成二十二年使用教科書のうち、高等学校で必修修である「国語総合」の教科書は、二三種二七冊である。このうち、古文教材を収録した二三冊について、どのような古典作品の、どの章段が採録されているのか調査した。【表1】として掲げる。

【表1】高等学校「国語総合」教科書に採用される

古文作品および採録箇所・章段

【凡例】

- 一、古典作品は成立年代順に並べた。
- 一、一作品から章段が複数採録される場合は、採録数が多い順に表に組み込んだ。
- 一、採録箇所は一般的な章段名や章段番号を示した。
- 一、表の煩雑を避けるため、教科書はあらかじめナンバリングして【表1】に組み込んだ。表中の教科書番号は(注3)に示す。

成立	作品	章段など	採録数	教科書の採録状況																						
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
平安時代	竹取物語	姫のおひたち	17	○	○		○				○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
		姫の嘆き	5									○													○	
		天の羽衣・姫の昇天	5		○																○	○			○	
	伊勢物語	6	16	○	○	○	○	○	○			○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		9	16	○	○	○	○	○	○			○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		23	15	○				○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		24	4			○	○						○				○									
		84	3	○							○														○	
		4	1		○																					
	土左日記	83	1			○																				
		125	1							○																
		門出(十二月二十日)	14	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		補京(二月十六日)	10	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		忘れ貝(二月四日)	4				○				○										○					
		亡子(十二月二十七日)	3	○										○				○								
		かしろの雷(一月二十一日)	2			○				○																
	枕草子	阿倍仲麻呂(一月二十日)	1																							
		掛取の心は神の御心(二月五日)	1																							
		大和物語	沖つ白波	2										○			○									
		枕草子	序	3										○	○	○	○									
			280	2										○	○											
			26	1											○											
			41	1											○											
			98	1																						
			122	1																						
			123	1																						
			144	1						○																
			207	1																						
			230	1																						
	232	1																						○		
	今昔物語集	更級日記	竹笠寺	1																						
		阿蘇の史	3																						○	
	今昔物語集	検非違使忠明	2																						○	
羅生門		1																						○		

成立	作品	章段など	採録数	教科書の採録状況																						
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
鎌倉時代	平家物語	木曾の最期	15	○	○	○				○																
		祇園精舎	9	○	○					○														○	○	
		宇治川の先陣	3		○							○													○	
		教盛の最期	1						○																	
		能登殿最期	1							○																
	宇治拾遺物語	権児の空猿	17	○	○	○	○	○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		絵仏師良秀	8											○			○	○	○	○	○		○			
		検非違使忠明	5	○		○								○	○									○		
		田舎の呪、狐の腹をも見てはくこと	1							○																
		後の千金のこと	1							○																
		頭の雪	1																○							
		尼、地蔵を見奉ること	1																						○	
		百鬼夜行	1												○											
		晴明の術くらべ	1											○												
		小野篁の広才	1																						○	
	竜（蔵人得業忠印）	1																						○		
	古今著聞集	母子猿	2				○																		○	
		竹生鳥の水練	1																						○	
	十訓抄	事説が覆書、まの巻末をはずすこと	1																						○	
		大江山	6			○				○					○						○	○			○	
	沙石集	頼宗といふ笛吹き	1												○											
		ねずみの積とり	3											○	○		○									
	鎌倉時代	徒然草	児の知恵	2											○	○										
いみじき成敗			1													○										
序			11												○	○	○	○	○	○	○			○	○	
236			10	○		○	○								○										○	
52			7			○	○								○	○								○	○	
89			7			○	○								○	○							○	○	○	
92			6				○	○							○										○	
109			6								○	○			○	○								○	○	
137			6				○				○										○	○			○	
45			5			○					○	○													○	
51			5	○	○		○																	○		
11			4				○																		○	
189			3		○																				○	
19			2												○										○	
32			2													○									○	
41			2	○																					○	
59			2				○																		○	
71			2								○														○	
117			2								○					○									○	
188			2								○														○	
12			1																						○	
29			1	○																					○	
31			1		○																				○	
53			1													○									○	
68			1																						○	
88			1																						○	
141			1																						○	
150	1																						○			
152	1													○									○			
155	1																						○			
185	1																						○			
243	1													○									○			
方丈記	ゆく河の流れ	2																					○	○		
	安元の大火	1																						○		
伊曾保物語	馬と犬のこと	1			○																					
	鳩と鶴	1																								
江戸時代	奥の細道	太族の皮（題なし）	1																							
		旅立	20	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
	平泉	19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	立石寺	11	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○			
	大垣	4	○																							
	那須黒羽	2			○				○																	
	景上川	2																					○			
	白河の関	1																						○		
	敦賀	1																						○		
	常山機談	山吹の花	1																					○		
	折たく柴の記	利根と気根	1																					○		
	花月草紙	両頭の蛇	1																					○		

【表1】より、調査した全ての教科書に、徒然草および奥の細道が取り上げられていることが分かる。また、特に平安時代から鎌倉時代にかけて成立した作品が、多く取り上げられていることが分かる。

また、国語総合で教材化される箇所は、作品によっては限定的なものであることも分かる。例えば、伊勢物語は、調査した二三冊中、二〇冊の教科書に取り上げられているが、国語総合の教科書に採録されているのは全一二五段中八段に過ぎず、特に、第六段（「芥川」、第九段（「東下り）」、第三段（「筒井筒」）の三段に偏って採録されている。

それに対して、全ての国語総合の教科書に取り上げられている徒然草は、全二四三段中三〇段（序段を含む）が採録されている。【表1】より、序段が最も多くの教科書に採録されていることが分かる。以下、第二四三段（十冊）、五二段・八九段（以上七冊）九二段・一〇九段・一三七段（以上六冊）が、採録されることの多い章段ではあるが、伊勢物語ほどに、偏った章段を採録する状況とはいえない。

どの作品についても、教科書・注釈書・古写本の異同の問題は存在するであろうが、本稿では教科書を調査した中で最も多くの章段が採録されていた徒然草について、以下で検討していく。

3 依拠注釈書と教科書の比較

各教科書は、どのような注釈書に依拠しながら、徒然草の本文を作成しているのだろうか。依拠した注釈書を、教科書ごとにまとめる。

【表2】 依拠注釈書と教科書の関係

（教科書番号は（注3）を参照のこと）

教科書が依拠した注釈書	注釈書の底本	教科書番号
西尾実校注『日本古典文学大系33 方丈記 徒然草』（岩波書店 一九五七）	烏丸光広本 （東大国語 研究室蔵）	3・4・5・ 9・12・14・ 15
神田秀夫・永積安明・安良岡康作校注訳『新 日本古典文学全集44 方丈記・徒然草・正法 眼蔵随聞記・歎異抄』（小学館 一九九五）	烏丸光広本 （日本古典 全集本）	1・2・6・ 7・10・11
神田秀夫・永積安明・安良岡康作校注訳『日 本古典文学全集27 方丈記・徒然草・正法眼 蔵随聞記・歎異抄』（小学館 一九七一）	烏丸光広本 （日本古典 全集本）	16・17・23
西尾実・安良岡康作校注『新訂 徒然草』（岩 波書店 一九八五改版）	烏丸光広本 （所蔵機関 非明示）	21・22
不明		19・20 8・13・18

【表2】より、注釈書が不明な教科書があるものの、徒然草の場合、四種の注釈書を参照していることが分かる。また、各注釈書の凡例で底本となった注釈書を確認すると、所蔵機関は異なるものの、烏丸光広本を用いていることが分かった。なお烏丸光広本は、徒然草諸本中、代表的な流布本といわれる版本で、下冊には慶長一八（一六一三）年に権中納言烏丸光広が校訂した旨の奥書を有する資料である。

3.1 注釈書と教科書の比較―第四五段を例として―

ところで、教科書に採録されている徒然草のテキストと注釈書を見比べると、いくつかの異同があることが分かる。

ここでは、五冊の教科書に採録されている第四五段（公世の二位のせうとに）⁽¹⁾ について見ていこう。第四五段を採録する教科書は、2・6・7・8・11の五冊である。8以外は、新全集本の本文に依拠した旨が記されているため、まず、新全集本の本文を左に引く（出版社が同じ6・7が新全集本の本文に依拠しているので、8も恐らく新全集本に依拠していると考えられる）。

第四五段

公世の二位のせうとに、良覚僧正と聞えしは、極めて腹あしき人なりけり。坊の傍に、大きな榎の木がありければ、人、「榎木僧正」とぞ言ひける。この名然るべからずとて、かの木をきられにけり。その根のありければ、「きりくひの僧正」と言ひけり。いよいよ腹立ちて、きりくひを堀り捨てたりければ、その跡大きな堀にてありければ、「堀池僧正」とぞ言ひける。（新全集本・一一七頁）

新全集本のテキストと、各教科書のテキストを見比べてみると、

(ア) 語句の異同、(イ) 表記の異同等が指摘できる。例として、(ア) (イ) が指摘できる教科書を次に引く。(ア) (イ) をそれぞれ指摘し、該当箇所を線を付した。

(題) 公世の二位の兄人に

公世の二位の兄人に、良覚僧正と聞こえしは、極めて腹あしき人なりけり。坊の傍に、大きな榎の木がありければ、人、「榎木の僧正」とぞ言ひける。この名しかるべからずとて、かの木を切られにけり。その株のありければ、「切りくひの僧正」と言ひけり。いよいよ腹立ちて、切りくひを堀り捨てたりければ、その跡大きな堀にてありければ、「堀池の僧正」とぞ言ひける。（教科書番号2）

左で示した教科書本文を見比べると明らかのように、注釈書と当該教科書には次の異同がある。

(ア) 語句の異同

(i) 「根」・「株」

(イ) 表記の異同

漢字表記と仮名表記の問題

(i) 「せうと」・「兄人」、(ii) 「あしき」・「悪しき」、(iii) 「然る」・「しかる」

送り仮名の問題

(i) 「極めて」・「極めて」、(ii) 「傍」・「傍ら」、(iii) 「榎木僧正」・「榎の木僧正」、(iv) 「堀池僧正」・「堀池の僧正」

右の比較から、注釈書に依拠した旨が明記された古文テキストであっても、実は、注釈書のテキストを更に編集したものであることが分かる。

3.2 語句「改変」の妥当性―「ネ(根)」「カブ(株)」について―

では、特に(ア)語句の異同について、日本語史研究の立場から、考えてみる。

まず、両語を「日本国語大辞典」(ジャパンナレッジ版)^(注5)で引くと、左のようにある。

「ネ(根)」

①高等植物の基本的な器官の一つ。普通は地中であって、植物体の支持および、水と栄養分の吸収を主な機能とする。一般に先端に根冠と根毛を持つ。通常の働きをするもののほか、水根、気根、呼吸根、同化根、寄生根などの変態根がある。

*古事記「七二二」下・歌謡「纏向の 日代の宮は (略) 竹の泥の 泥足る宮木の泥の泥蔓ふ宮」

*万葉「八〇後」一九・四一五九「磯の上の都万麻を見れば根を延へて年深からし神さびにけり (大伴家持)」

*後撰「九五―九五三頃」恋四・八四四「枝もなく人に折らるる 女郎花ねをだに残せ植ゑし我がため (平希世)」

*大鏡「二二〇前」一・後一条院「うゑきは、根をおほしてつくる ひおほしたてつればこそ、枝もしげりて、このみもむすべや」

*色葉字類抄「二七七八二」「根 ネ草木本也」(以下省略)

②物の基礎となり、それを形づくる根本となる部分。ねもと。つけね。(用例省略)

③裏面にかくされた本性。また、その結果を誘引した原因。

(イ) ことの起こり。起源。もと。根本。原因。根拠。ねもと。

*源氏「二〇〇―二〇四頃」紅梅「同じ花の名なれど、梅は生ひ出

でけむねこそ哀なれ」

*徒然草「二三三―三三頃」九「愛著の道、その根ふかく、源とほし」(以下省略)

「カブ(株)」

①植物の根もと。

(イ) 木を切った後に残った幹または根。きりかぶ。くいぜ。

*玉塵抄「二五六三」一〇「枯れ朽た木のかぶに芝菌のくさびらかはゆるぞ」

*日葡辞書「一六〇三―一〇四」「Cahu (訳) 伐採したあとに残る樹木や竹などの幹」

*男重宝記(元禄六「一六九三」)三・二「鉢に楢をいけて心をさすなり。楢一つのときは、鉢の中ずみに立て、むかひより心を出すなり」

(ロ) 植物の何本にもなった根もと。株立ち。

*御湯殿上日記・文明一八「二四八六」年正月八日(頭書)「うちのおん院より、なんてんのかふともあまたまいる」

*俳諧・続猿蓑「二六九八」春「掘おこすつじの株や蟻のより(雪芝)」

*咄本・露休置土産「二七〇七」二・四「方々にぼたんあれ共、貴様の程いろいろのかぶ持ちたる人はなし」(以下省略)

「日本国語大辞典」は、「その語、または語釈を分けた場合は、その意味・用法について、もっとも古いと思われるもの」(第二版・凡例・七頁)を用例として採用している。したがって、各語の用例や所収資料を見れば、いつ頃に(いつ頃から)使用されていた語であるの

か、追認が必要ではあるが、大凡の見当がつく。

まず、「ネ(根)」は、古事記・万葉集での用例が挙がっているため、上代から使用されていたことが分かる。

一方、「カブ(株)」は、挙がっている中で古い資料であっても一五世紀後半の資料(御湯殿上日記)で、意味用法として、徒然草の当該箇所と一致する用例は、一六世紀半ばの資料(玉塵抄)が挙がっている。以上、「日本国語大辞典」から用例を拾ってみると、「カブ(株)」は室町時代には使用されていた語であることが分かる。

ところが、それ平安・鎌倉時代に編纂された古辞書類では、「カブ(株)」という語を見出すことができない。例えば、色葉字類抄(三巻本)に「カブ」の項はなく、類聚名義抄(観智院本)の「株」字に「カブ」の訓はないのである(左参照)。

株 音誅^① ク^②ヒ^③セ^④ エタ

類聚名義抄(観智院本) 仏下本・四八表四

また、築島裕編『訓点語彙集成』(汲古書院 二〇〇七―二〇〇九)で「カブ」の項および「株」に付訓される語^⑤を調べたが、「カブ(株)」という語を見出すことはできなかった。宮島達夫編『笠間索引叢刊4 古典対照語い表』(笠間書院 一九七二)でも、「カブ(株)」という語は立項されていない。

「カブ(株)」という語が、一体、いつ頃から使用された語であるのか、改めて調査する必要があるけれども、少なくとも、徒然草を著述したとされる兼好が活動した時期の資料からは、「カブ(株)」という語の使用が認められないのである^⑥。

4. 本稿のまとめ

本稿では、注釈書に依拠した旨が記されている教科書の古文テキストであっても、語句・表記レベルで様々な「改変」が行われる一例を示した。他の教科書では、第四五段について、改行によって段落を示したり、心情を表す部分に鈎括弧を施すなど、学習者が解釈を行うための工夫とも取れる「改変」も見られた。

これらの「改変」は、想定される読者(教科書の場合は学習者)の解釈を助けることを前提として行われている限り、絶えず行われるものであろう。しかし、この「改変」されたテキストが、本来のテキストからずれたものになっているのではないか、また、それを無批判に、絶対的なものとして、学習者だけでなく教師自身も、取り扱っているのではないかという危惧を稿者は持っている。

実際、「改変」によつて、実は著述者が使用しない語がテキストに紛れ込む可能性があることを、「ネ(根)」と「カブ(株)」で示した。ただ、それは、実は教科書や注釈書だけの問題ではない。徒然草の古写本をいくつか調べてみると、第四五段に「カブ(株)」という語が記されているものがいくつか存在する。教科書・注釈書と比較できるように、いくつかを次に示す^⑦。

《烏丸本》

公世の二位のせうとに・良覚僧正と聞えしは・極てはらあしき人也けり・坊の傍におおきなる榎の木の有ければ・人・榎木僧正とぞいひける。此名然べからずとて・かの木をきらせにけり・その根のありければ・きりくひの僧正といひけり・いよ／＼はら立て・きりくいをほり捨たりければ・その堀おほきなる堀にてて^⑧・有ければ・堀池僧正とぞいひける

《細川本》…流布本の一、幽齋本系統の根源をなすと目される写本
公世（公世あり、本傳に未だ洞院ノ成子とあり）の二位（公世に未だ兄とあり）のせうと（公世に未だ兄とあり）に良覚僧正（公世に未だ兄とあり）と（公世に未だ兄とあり）いひける

かたはら（右傳に傳手あり）におほきなる榎木（右傳に傳手あり）ありければ（右傳に傳手あり）人（右傳に傳手あり）えの木（右傳に傳手あり）の僧正（右傳に傳手あり）とぞ（右傳に傳手あり）いひける 此名（右傳に傳手あり）しかるへ（右傳に傳手あり）からず（右傳に傳手あり）とてか（右傳に傳手あり）の木（右傳に傳手あり）をき

られにけり そのね（右傳に傳手あり）のありければ（右傳に傳手あり）きりくひ（右傳に傳手あり）の僧正（右傳に傳手あり）といひけり いよ（右傳に傳手あり）はら（右傳に傳手あり）立（右傳に傳手あり）てきり（右傳に傳手あり）くひ（右傳に傳手あり）をほりすてたり そのあと（右傳に傳手あり）おほきなるほりにてありければ（右傳に傳手あり）堀池（右傳に傳手あり）の僧正（右傳に傳手あり）とぞ（右傳に傳手あり）いひける（右傳に傳手あり）

《正徹本》…徒然草中、最も書写年代が古い写本
公世の二位のあに良覚僧正ときこえしはきはめて腹のあしき人なりけり
坊のかたはらに大きなるえの木（右傳に傳手あり）のありければ人（右傳に傳手あり）え（右傳に傳手あり）の（右傳に傳手あり）僧正（右傳に傳手あり）とぞ（右傳に傳手あり）いひける

この名しかるへからすとてか（右傳に傳手あり）の木（右傳に傳手あり）を（右傳に傳手あり）き（右傳に傳手あり）られ（右傳に傳手あり）に（右傳に傳手あり）けり（右傳に傳手あり） そのか（右傳に傳手あり）ふ（右傳に傳手あり）の（右傳に傳手あり）あり（右傳に傳手あり）ければ（右傳に傳手あり）きりくひ（右傳に傳手あり）の僧正（右傳に傳手あり）とよひけり いよ（右傳に傳手あり）く（右傳に傳手あり）腹（右傳に傳手あり）を（右傳に傳手あり）たち（右傳に傳手あり）て（右傳に傳手あり）きりくひ（右傳に傳手あり）をほりすてたり

ける跡大なるほりにて有ければほりけの僧正とぞいひける

《常縁本》…伝東常縁書写、祖本が徒然草の原形本ともいわれる写本
公卿の二位の兄に良覚僧正と聞えしはきはめて腹のあしき人成けり おほきなる榎の（右傳に傳手あり）有（右傳に傳手あり）ければ（右傳に傳手あり）榎（右傳に傳手あり）の僧正（右傳に傳手あり）とぞいひける 此名（右傳に傳手あり）然（右傳に傳手あり）へ（右傳に傳手あり）から（右傳に傳手あり）すと（右傳に傳手あり）てか（右傳に傳手あり）の木（右傳に傳手あり）を（右傳に傳手あり）き（右傳に傳手あり）られ（右傳に傳手あり）に（右傳に傳手あり）けり（右傳に傳手あり） 其か（右傳に傳手あり）ふ（右傳に傳手あり）の（右傳に傳手あり）有（右傳に傳手あり）ければ（右傳に傳手あり）きりくひ（右傳に傳手あり）の僧正（右傳に傳手あり）とよひけり いよ（右傳に傳手あり）く（右傳に傳手あり）腹（右傳に傳手あり）を（右傳に傳手あり）立（右傳に傳手あり）て（右傳に傳手あり）きりくひ（右傳に傳手あり）をほり捨たりけり 其跡大なる堀にて有ければほりけの僧正とぞいひける

りけの僧正とぞいひける

ここで掲げた古写本の翻刻から分かるとおり、正徹本や常縁本で、「カブ（株）」と記されている（注）。また、表記や語句の問題のみならず、様々な点で、教科書や注釈書のテキストと異なっていることが分かる。

このように丁寧に見てみると、短い古文テキストであっても、様々な異同が存する。それは、授業で取り扱う一冊の教科書だけを見ても分からないことなのである。

少なくとも古文テキストを教材とする教師は、テキストのことばを絶対的なものとして扱うのではなく、テキストが「改変」されていることを前提としながら、批判的に分析していく姿勢を持つことが必要であろう。

【注】

*1 平成二〇年度小学校学習指導要領では、第5学及び第6学年 2 内容
〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕ア（ア）として、「親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。」と記された。

*2 日本語史研究の立場から、国語科教科書における古文テキストの「改変」について述べたものとしては、野村剛史『歴史文化ライブラリー 311 話し言葉の日本史』（吉川弘文館 二〇一一年）に以下の指摘がある。

（前略）高校の「古典」は、もともとのテキストにいろいろな操作を加えているので危ういところがある（後略）（二頁）

たとえば、現代の高校の教科書の古文は、「歴史的仮名遣い」によって整然としている。この現代に整理された「歴史的仮名遣い」によって、たとえば、『新古今和歌集』の時代（二二〇〇年頃）の音韻を再構（引用者

注、古い時代の言語を「再現・再構築」しようとする試み(同書五頁)することはできないのである。(二九頁―三〇頁)

*3 本稿で調査した「国語総合」教科書は以下の通りである。

1 国語総合改訂版(教育出版)、2 新国語総合(教育出版)、3 探求国語総合(古典編)改訂版(桐原書店)、4 展開国語総合改訂版(桐原書店)、5 発見国語総合(桐原書店)、6 高等学校国語総合改訂版(三省堂)、7 新編国語総合改訂版(三省堂)、8 明解国語総合(三省堂)、9 国語総合(数研出版)、10 国語総合改訂版(大修館書店)、11 新編国語総合改訂版(大修館書店)、12 改訂版高等学校国語総合(第一学習社)、13 高等学校改訂版新編国語総合(第一学習社)、14 改訂版高等学校標準国語総合(第一学習社)、15 高等学校新版国語総合(第一学習社)、16 国語総合(改訂版)(筑摩書房)、17 精選国語総合(改訂版)(筑摩書房)、18 国語総合(改訂版)(東京書籍)、19 新編国語総合(東京書籍)、20 精選国語総合(東京書籍)、21 高校生の国語総合(明治書院)、22 新精選国語総合(明治書院)、23 国語総合(右文書院)

*4 振り仮名の有無も教科書間の異同のように見えるが、既習の語彙に振り仮名を振らない教科書が多く、振り仮名の有無は前後の教材との関係で決まる側面があるため、振り仮名の有無は本稿で取り上げない。

*5 ジャパンナレッジ (<http://www.jkd1.com/topcompdisplay>) による(最終閲覧二〇一一年三月三日)。

*6 築島裕編『訓点語彙集成 別巻』(汲古書院 二〇〇九)に収録されている漢字索引によると、「株」字に付訓された語は、「クヒゼ」(一〇例)、「キノネ」(四例)、「ハラ」「モト」(各一例)であった。

*7 いわゆる和漢混淆文体とされる平家物語諸本(ただし、鎌倉時代に成立したとされるものに限る)のうち、寛一本系の索引(金田一春彦・清水功・近藤政美編『平家物語総索引』(学習研究社 一九七三)・近藤政美・武

山隆昭・近藤三佐子共編『平家物語高野本語彙用例総索引 自立語篇』(勉誠社 一九九六)および増補本系の索引(麻原美子・小川栄一・大倉浩・佐藤智広・小井土守敏編『長門本平家物語自立語索引』(勉誠社 二〇〇九)・北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 索引篇 上下』(勉誠社 一九九六)では、「かぶ(株)」を見出すことが出来なかった。また、今昔物語集については、小峯和明編『新日本古典文学大系別巻 今昔物語集索引』(岩波書店 二〇〇二)に「株かぶ」として第七巻「震旦幽州僧知苑、造石経蔵納法門語第四十五」が挙げられているが、先に挙げた類聚名義抄(観智院本)の記述から、中世前期において「株」を「かぶ」と訓じたかは疑わしい。大系本は当該箇所を付さないが、大系本をもとにした索引である馬淵和夫監修『今昔物語集漢字索引』(笠間書院 一九八四)は「クヒゼ」としている。馬淵編(一九八四)によると、大系本中で「株」字が用いられている例は当該箇所のみである。以上のことから、現在のところ、いわゆる和漢混淆文資料でも、中世前期に成立したとされる資料における「かぶ(株)」という語の使用は認められない。

*8 次の影印本により、翻刻を行った。

《烏丸本》…東京大学文学部国語学研究室所蔵 小林祥次郎解説『烏丸光広本 徒然草』(勉誠社 一九九六)

《正徹本》…静嘉堂文庫蔵 吉田幸一・大西善明編『正徹自筆本 徒然草 上・下』(笠間書院 二〇〇四・二〇〇七)

《常縁本》…古典文庫所収 吉田幸一編・村井順校注『古典文庫第一九〇冊 つれづれ草 常縁本上巻』(一九六三 古典文庫)

《細川本》…東京大学文学部国語学研究室所蔵 桑原博史解説『東京大学文学部国語学研究室蔵 徒然草 細川幸隆本 上・下』(勉誠社 一九七八)

なお、徒然草の最も古い形を有する伝本かと目される東海大学蔵本(い

わゆる藍表紙本）についても調査したが、当該箇所が欠落しており（稿者の調査による。東海大学桃園文庫影印刊行委員会編『東海大学桃園文庫影印叢書第八巻 徒然草Ⅰ』（東海大学出版会 一九九二）所収の解説にも欠落章段の指摘がある）、比較することができなかった。

翻刻に当たり、次のように心がけた。

- 一・古写本の字体は現行の正字体に改めた。
- 一・翻字注は、「」で括った。
- 一・ページが改まる場合のみ、翻刻に「」と頁番号を付した。
- 一・読みやすさの工夫として、一文が終わると考えられる箇所に一マス分の空白を挿入した。

*9 その理由について、稿者は明確な答えを持たないが、正徹本・常縁本の書写者かどうかはともかくとして、どこかの段階で、書写者のことばが入り込んだためではないか、と現段階では考えている。「カブ（株）」の語史と併せて、今後の課題としたい。

（広島大学附属中・高等学校講師非常勤講師）